第 3 回 SPARC Japan セミナー2015

「研究者向けソーシャルメディアサービスの可能性」

開会/概要説明

三根 慎二
（三重大学人文学部）

三根 慎二
三重大学人文学部講師。名古屋大学附属図書館研究開発室を経て、2010年より現職。専門は図書館情報学、特に学術コミュニケーション。

研究者が研究成果を出すには、何らかのプラットフォームが必要になります。「学術情報の円滑な流通を可能にする機能を持ったサービス」を通して、研究者は自ら行った研究成果を世の中に広く流通させてきました。伝統的には、研究者は査読制学術雑誌に論文を投稿し、発表することが重要視されています。そうした査読制学術雑誌をこれまで主に担ってきたのは、大手商業出版社や学協会でした。

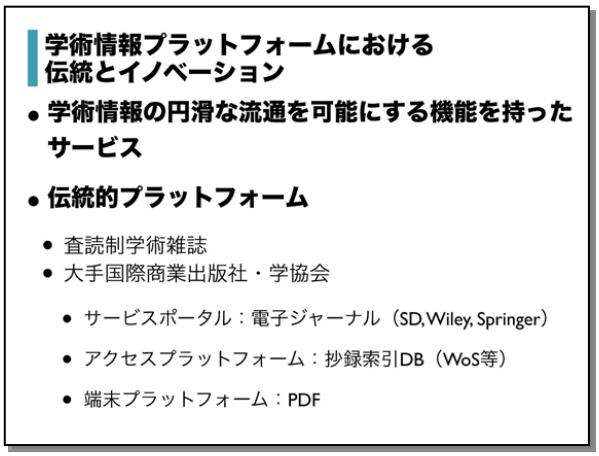
学術情報プラットフォーム

伝統的プラットフォームとしては、サービスポータルは ScienceDirect や Wiley などの電子ジャーナル、アクセスプラットフォームは Web of Science などの抄録索引データベース、コンテンツを実際に表示させる端末プラットフォームは PDF などがあります（図 1）。

それに対して、今はウェブ技術を利用した革新的なプラットフォームが現れています。少し違ったものをベンチャー企業やスタートアップ企業が提供しています（図 2）。サービスポータルとしては、ResearchGate や Academia.edu などの研究者向けソーシャルネットワークサービスがあります。アクセスプラットフォームとしては、Google が Google Scholar を提供しています。端末プラットフォームとしては、PDF に代わる新しいフォーマットとして、ReadCube が出ています。

このような新しい技術が世の中に出てくることと、実際に研究者が使うことは全く別の問題ではあるのですが、さまざまな調査結果から、こうした新しいイノベーティブなプラットフォームが研究者の間で使われはじめていることが示されています。

「ネイチャー」が自然科学系の研究者に対して行っ

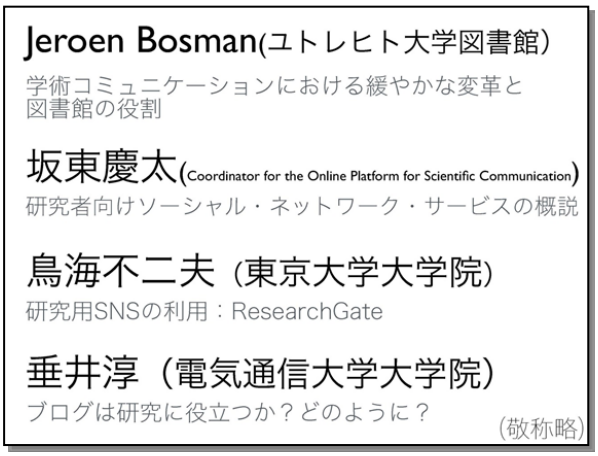


（図 1）

た調査結果では、ResearchGate や Google Scholar は、非常に多くの研究者が認知していて利用していることが分かっています。別の 2015 年度の新しい調査では、ResearchGate を利用している研究者が非常に増えていることが分かりました。

われわれ日本人も、そのようなものを結構使っているということが、別の調査で示されています。2003 年の Web of Science に収録されている論文をベースとして、それがどれだけ ResearchGate にアップロードされているかを示したグラフを見ると、一番多いのはアメリカで約 14%ですが、日本もアメリカに伍する形です。たくさんの論文が ResearchGate にフルテキストでアップロードされ、研究者の中で、新しい革新的サービスがかなり受け入れられているのではないかという感触が得られています。

（図 2）



（図 3）

革新的プラットフォームの課題

一方で、新しいサービスに対しては懐疑的な意見も示されているのが現状で、研究者は保守的なところもあるので、新しいサービスを全ての人が使うわけではありません。研究者の革新的なプラットフォームに対する評価の調査結果を見ると、革新的なプラットフォームの弱みとしては、信頼性がない、数値操作の対象になってしまう、研究活動のコアの部分と関係がないので使わないということが挙げられています。

他にも、多くの人は新しいツールはまだ研究の評価には使えないと考えているのが現状だと思います。新しいサービスが出てきて、メディアで紹介され、実際に研究者に使われてはいますが、一方で研究者はこのようなサービスに保守的な態度を取っているのです。

このようなサービスをどうやって学術コミュニケーションに関わる人たちが見ていけばいいのか、評価すればいいのか、携わっていけばいいのかはまだよく分かっていない問題です。そうした問題意識が、今日のセミナーの背景にあります。

本セミナーの流れ

今日は、このようなテーマを扱うに当たって、4 名の方にお越しいただきました（図 3）。最初のお二方が概要、解説で、後のお二方が事例紹介、報告の形になります。

ユトレヒト大学図書館の Jeroen Bosman さんは、有名な 101 Innovations in Scholarly Communication というプロジェクトをされていて、新しいイノベーションに見識をお持ちです。新しいツールにどのようなものがあるのか、そのようなツールが研究活動にどう携わっているのか、新しいツールに対して大学図書館がどう関わっていくことができるかに関してお話しいただきます。

坂東慶太さんは、新しい学術情報プラットフォームに関して、長らく日本を代表して携わってきた方です。今日は、「研究者向けソーシャルネットワークサービスの概説」と題して、ResearchGate、Mendeley、

Academia.edu に関して、どのようなサービスなのか概要をご説明いただき、最後に図書館がどう関わっていくかについてもお話しいただきます。

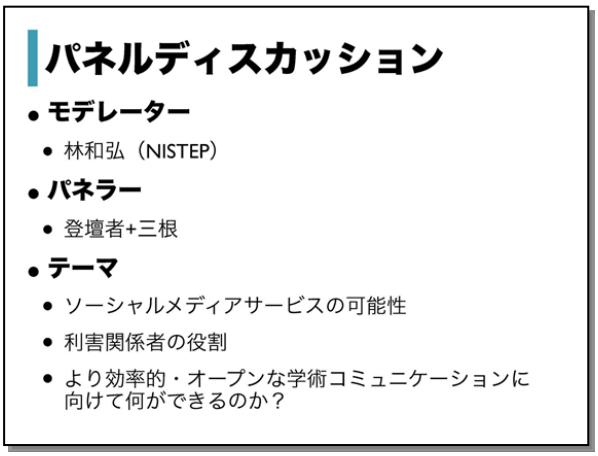
鳥海不二夫先生には、ResearchGate についてお話しいただきます。実際に利用されている経験から、どういう利点や問題点があるのか、あとはソーシャルネットワークサービス、ソーシャルメディアサービスの研究の知見を生かして、ResearchGate をどのように評価することができるのかについてお話しいただきます。

垂井淳先生は、Polymath プロジェクトという、数学分野のブログを活用した有名なプロジェクトに古くから参加されていて、その体験談を通してブログの研究活動における位置付けをお話しいただきます。

最後のパネルディスカッションは、モデレーターは NISTEP の林和弘さん、パネラーは私と登壇者の方々です（図 4）。まず、ソーシャルメディアサービスにどのような可能性があるかについて、概論や各論に至るいろいろなテーマについて議論したいと思います。

二つ目に、新しいサービスに関して、学術コミュニケーションに関わる利害関係者がどのような役割を果たすことができるのかについて考えてみたいと思います。ここにいらっしゃる利害関係者の方に質問が飛ぶと林さんから伺っているので、ぜひ準備しておいてください。

最後に、より大きな話として、こういう新しいツールを活用して、今の学術コミュニケーションをより効率的に、あるいはオープンにすることはできるのか、できるとしたらどのようなことが考えられるかについて議論したいと思っています。



（図 4）